



子 供 讚 歌 (二二)

倉 橋 惣 三

一 一 歸 國

1 留 守 宅

船は歸心を載せてマルセーユを出る。多少ともユーロツピヤナイズされた目に耳に、再びオリエントを蘇らせる港々の航路は、いきなりハワイ、サンフランシスコ、サンタフェー急行で米大陸を横断してシカゴ着という往路よりは旅ごころを味いこまかくする。連れないキヤピンの夜は、留守宅の夢ばかりである。

彼の旅愁を慰めるための妻の手紙によると、小學生になつた長男は、お父さんは洋行でえらくなつて歸るといつてゐるそうだ。(苦笑)。茶目の次男は、お父さんが八十錢の練瓦のお家をお土産に買つて来てくれるといつてゐるそうだ。(微笑)。末の娘は、おとうちやんがいけない、おとうちやんがいけないといつてゐるそうだ。(微笑)。おばあちやんと、おかあちやんと、おうちやんやおばあちやん達に可愛がられて、楽しい日を送つてゐる一人々々が、出發の時の顔に生長のXを加えて、目の前に浮んでくる。父の旅を家庭教育の空白期と考える一方、母がいれば子供の幸福はあるものとも考へる。それからまた、常にはいつしよにいなかつたおばあちやんというものに、どんなにか親しんでゐることだらうとも考へる。

それにしても、父の死後を過ぎること年餘。一人子の彼が旅にゐることは、母の心を淋しくしてゐるに相違ない。時折り二階でお獨り三味線を出してひいていられますという音信の一節は、小柄な母の座り姿を想わせる。母は針仕事好きの人であつた。彼が一番しみ／＼と母を想うのは、靜に座つて縫いものをしてゐる母のなで肩である。その

古風な針箱の側には、その時々々の年齢の自分が寝ころんでゐる。その針箱の抽出しから、母が彼のために自分で焼いた醬油の香の高いカキモチが取り出された思いもある。針仕事が好き、カキモチを焼くのが上手だった母は、髪を結うことも得意で、好んで妻の頭をいぢつて興じたりした。そういう一面に母はまた學問の好きな人であつた。彼が女高師に奉職してからのこと、『今だつたら私も女子高等師範學校の生徒になつたがね』と、屢々笑いながらいつたりした。母にどれだけの學問があつたのか知らないが、彼の小學生時代、いつしよに湯にはいると、立てかけた風呂の蓋に、ぬれた指でいろんな字を書いて、字劃の話をふざげ口調でしてくれた。山はまんなかゞ高く、川は下に流れるとか、一して矢してひつかけて、ル又の下に、西を書く(醫)といつた類だ。それから、彼は随分おおきくなつても、母といつしよに寝た甘つたれ坊やだつたが、そんな時の楽しみは、靜かな聲で暗誦して聞かせてくれる詩文の語句だつた。その中には、『ベンセイシユクシユク』があつた。『ツキオチカラスナイテ』があつた。そうして、アカツキニミルお煎餅ではないんだよとか、キンザンジつてお味噌ではないんだよとかいう笑註(?)が幾度も繰りかえされた。後で考えると、四書の中の短い言葉などもあつたが詩の方が多かつたようだ。漢詩と共に加賀の千代の『朝顔につるべとられてもらい水』とか、信濃の「茶の『やせ蛙負けるな一茶ここにあり』」などの發句を、子供ごころで愛誦したのも、床中教室の楽しいレッスんだつた。母は必ず加賀のとか、信濃のとかいつた。昔風にそういう癖になつていたのである。それからまた、父の父は江戸俳壇の其角堂永機宗匠と懇意な俳人だつたし、母の父は幾つかの歌集を自己出版した歌人だつたし、その中のものを母から聞かされたことも度々ある。

この地味な母が三味線を嗜むようになったのは、全く父への同調であつた。そうして、後には文樂の太夫をよんだり、哥澤の家に稽古をつけてもらつたりして、すつかり大天狗になつていた父のふだんのエキサイズには、フトでもホソでも立派に相手をしてゐた。——ひとりになつてからも、とき／＼、手なれた撥を取り出したのも、たゞつれ／＼のすさびというだけではなかつたのであろう。

お琴よりもシャミといつた好みの中に育つて、彼の環境は少くとも外觀ストインズムではなかつた。指に撥だこのある師匠株のばあさん藝者たちが、いつも出入して、ちよこなんと座つていたし、若い妓の陽氣を笑い聲も聞えた。父は、その連中に、座敷外の息ぬきをさせてやるといつた大通な態度だつたし、彼等は、父のいない日でも常に母のところへ遊びに來た。母もその人達に、くろ／＼としてでなく、それ／＼ゆきわたつた迎え方をしたから、彼等も若

い母に禮を守つて親しんでいた。又、幼いおぼつちやんの上手な遊び相手にもなつた。こんな環境が彼のために特によかつたということは勿論なからうが、そういう人達を、なんでもない目で見るようには慣らされた。後に軍隊に入つた時など、宴席でそろりメチヘンらに對する田舎出の若い少尉たちの異常興奮が不思議な位だつた。これは一種のマヒの心理學で説明されることもかも知れないが、そういう女達をなみの人間として見ることに慣らされていたのだと彼は自分を解釋している。そんな譯か(??)、少くも幼時のそういう環境のために、格別道樂息子にもならなかつたし、その反動というのではないが却て野暮な青年になつた。とにかく、彼の家庭はモラリスチックよりも人間なみだつたといえるかも知れない。そんな調子だつたから父母が劇場や寄席へゆく時も、よく彼をつれていつた。それも、父の好みから、所謂團菊左の外に、當時の團藏とか歌六とか源之助とかの濞い舞臺が多く、圓喬や小土佐や橘之助の高座が多かつた。決して、兒童藝術教育とはいえないものだつたが、高等學校や大學で、キザな連中のナマな劇通やドロ臭い江戸趣味論に仲間入しなかつたのも、こういう教養(?)の下地のせいだつたかも知れない。とにかく、(幾度もとにかくで片づけるが)彼の家庭は警戒教育よりも、あけつびろけた親子共樂主義だつたのである。彼は後に、モラリストの家庭の子弟の墮落例を聞く毎に、教育的環境學も簡單な原則だけでは、片のつかないものがあるらしいと、首をかしげつゝ、我が父母の、教育的神經質でなかつたことを思いだすのである。

教育的に神經質ではなかつたけれども、その生活の實際からは印象づけられたことがある。父は人に負けることが嫌いで、そのために家庭生活も派手好みだつたが、金錢は惜まないけれども、物は粗末にしないことは極端な程だつた。紙ぎれ一つ大切にし、古いものでも使える限り捨てなかつた具體例は、それを訓えられたり強いられたりしなかつただけになお印象させられている。それから、國の祈祭日の尊重は家の行事として堅く實行せられ、一度だつておろそかにされなかつた。母は、自己に克つ性格の人だつた。前にいつたような家内の生活に拘わらず、進んで社交を好むというのでなかつたけれども、如何なる時にも人を輕べつし人をみくびるということが決してなかつた。それから家の祖先の目をよく重んじた。いつも母がかつぼうの手腕を振つて、一家を喜ばせたのは、その日であつた。

とにかく(もう一度)母は、どこまでも我が家の母だつた。父の趣味に同調して三味線を勉強した母は、彼の一人子の青年期の宗教經驗に同調して、自ら進んで聖書を讀む人となつた母でもあつた。その母が、今は孫達に同調していつしよによく相手して下さると、妻のたよりにいつも書いてある。

コロンボ……シガンポール……香港……船は刻々、留守宅に近よつていく。

2 「日本の子供」

彼がロンドンにいた間、ブラツセルで開かれる世界児童保護會議に、日本代表の一人として出席するようにとの電報を、文部省から受けとつた。ベルギー皇帝の謁見があるというプログラムに必要な服装を急に用意して出かけた。若造の得意的喜び察すべきである。そうして、その會議のために派遣せられて來た内務省と司法省の二人の役人といつしよに、大きなホテルから豪華な會議場へ通つた。そのホテルのバルコニーには、鮮かな日章旗が立てられていた。氣品の高いベルギー皇帝は握手を賜つた。若きデレグートの緊張思うべきである。その得意と緊張は愛すべきヤングマン心理のことだつたとして、とにかく彼にとつて新しいことであつた國際會議という經驗から、會議の目的そのものは別にして、彼自身のためにどういふ新しいものが得られたらうか。得たというのも、おおきよう臭いが、『日本の子供』という考えを強くされたのである。今までにしても、彼の關心をもつた對象が日本の子供だつたには相違ないが、更めて『日本の子供』の具體的把握(自分でもよく分らない言ひ方が)に強く導かれたのであつた。

誰れでも、外國に出て自國のことを思いなおすのは普通らしい。彼も、秋のスイスの美しい空の下、ジュネーブの國際連盟本部の前の湖畔に立てならべられている萬國旗(連盟諸國旗)の中の日章旗に、日本で見なれた日章旗とは別の感慨をそゝられたことがある。しかしこの會議ではその場合とは少し違ふ。頻りと日本の子供が戀しくなつてきたのである。父の訃音以來、聊か懐鄉的になつたのか、子供さえ見れば、留守宅の子らを思う彼の狭い心に、『日本の子供』が浮かんできたのである。それも關心の抽象的對象としてではなく、あの町の子、あの村の子、あの遊び方をしている姿、あの歌をうたつてゐる聲の、日本の子供の具體的群像がなつかしくなつて來たのである。チャイルドといふ、アンファンといふ、キングダーといふ各國代表の發言を聞きながら、こどもと日本語でいつてみたいような氣さえ湧いてくるのであつた。妙なものである。

歸國後の彼が、駄菓子屋の調査と紙芝居の研究と、もう一つ、農繁期託兒所の唱道とに凝つたのも、どこかに、ブラツセルでの『日本の子供』への思いにつながりがあつたのかも知れない。

こゝで駄菓子屋というものは、裏町の長屋の間などにある小さい店で、その店さきには、マメイタ、ゴマネヂ、クロダマといった江戸傳統(?)の駄菓子と、細い竹筒入りのゼリーや、粗末な硝子びん入りのミカンスイなどが列べてあり、その一隅に、黒い鐵板が油光りするモンヂヤキの大火鉢を据えて、多くは髪の毛のうすい年増の『オバサン』か目のしよぼくした『オーバーチャン』が、うどん粉を掻きまわしてやつている。狭い上りがまちの土間には、小さな草履や赤い下駄が、重なりあつて脱ぎ散らしてあり、大勢の子供が、ニツケを嚙んだり、鹽豆をポリ／＼させながら、がや／＼と騒いでいる。實に楽しそうである。全くほ／＼えましい街の子供クラブの光景である。たゞ、その非衛生條件は、協同調査の醫學博士の警告を俟つまでもなく憂慮にたえない。尤も、彼の屢々探訪したのは京橋月島一帯で、そこは東京で小兒死亡率の高い(當時)地區として選ばれたのであつたが、この點は決して此邊に止まる問題ではあるまい。『日本の子供』(當時?)が蒙つている全般的不幸の大問題である。是非徹底的管理を要するね、と常に協同調査者の醫學博士と話しあつたことだが、それはクラブの問題で、クラブの本質的問題ではないねとも彼は附加えた。彼は駄菓子屋の『オバサン』や『オーバーチャン』を、決して理想のチルドレンスクラブマネージャーとは思わないが、クラブ員たちが、少しも氣がおけないという點は、クラブとしての要件を具えしめている。それが、その人達が子供すきなためか、或はそれを超えて、まるで子供のような人であるためかは分らないが、管理の徹底で、いゝクラブだ氣のおけるところということになつては、街の子供クラブの本質を奪うかも知れない。彼の調査(?)は、どこまでも子供のものとしての街の駄菓子屋の一認識(?)にあつた。

そういう『一文菓子』に對して、『一錢おもちゃ』と呼ばれるまゝに、駄菓子といつしよに列んでいるものは、小もの玩具である。メンコ、ベイゴマなどを古顔として、ブリキの豆汽車や、可憐なま／＼と道具の類が、子供の指に取りあげられるのを待つている。同じ小玩具でも伊勢勤風の精巧なママ雛とか、温泉土産などで見る器用な細工玩具は、おとなの趣味玩具だが、こゝでいう小もの玩具は、それらとは別である。ゲテモノ風でいてゲテモノのひねくれもなく、安ものでいて安ものゝ下卑たところもなく、高價玩具のような勿體ぶつたところもなく、所謂教育玩具のように利口ぶつたところもなく、どこまで無邪氣にハンブルに、いわばおもちゃといつた風の氣らくさまで、街の子供クラブの興をそえている。

彼は、こういう小もの玩具を、理想の兒童用品とは思わない。しかし、これも一つの『日本の子供』のものとして

その研究のために、神田町の裏通り(當時の)に軒をならべている小物玩具専門の問屋にひとしきり通つた。そうして、このブチクンストが如何に大量生産の商業になつてゐるかに驚き、その悉く廢物利用である製作工程に感心させられた。そうして『日本の子供』の玩具が、京都の人形や、銀座のトイズのような、アリストクラチックのものばかりでないことを詳かにしたのであつた。少くも、街の子供クラブの氣安さには、値段の安さだけではない、こういうものが附きものであつたのである。彼が後に文部省や各協會の玩具展覽會の審査員として、必ず小ものおもちやの陳列を提言したのも、玩具に關する彼の著書に、小もの玩具の一章を忘れなかつたのも、その結果である。

紙芝居は、まだポツ／＼出始めの時代であつた。社會的な注意もひかれず、識者先生方も黙殺(見落し)してゐた。が、『日本の子供』は、自分達のために發明されたこの日本独自の街のプロレタリアート・レクリエーションを見のがすには、餘りに娛樂に空腹であつた。彼は、その子供と共にというよりは、その子供群の中に交つて街の辻に人寄せの拍子木を追い、夕焼の原つばに立つたものだ。紙芝居屋のニイチヤンの中には、この變な紳士に警戒の目を見せるものもあれば、特別の來賓に一段とセリフを張り上げるものもあつた。彼は一應は前方でステージとストーリーに注意し、次には横から子供達の反應を見るところ順序で二回も三回もつゞけて見物した。そんな時には、五十錢の銀貨をフンパツして、餘はいらぬからと斷つて、特につゞけ見の許可を乞ふことにした。時には、この移動舞臺にくつついて歩いて、目の都の西ぞらに没するのを忘れたりした。子供たちもおかしな思つたことだらう。どうかすると、巧みなコワイロ附きの歌舞伎狂言におつかつたりすることがあつて、小觀客よりも紳士の方が面白がつたかも知れないが、外題は決していゝものばかりではなかつた。

彼は終に紙芝居やさんの一人に教えて貰つて、淺草の元締の家を訪ねることにした。初めにはげんなおももちで迎えられたが、彼は格子戸の中に腰を下ろして、そのあからがおの男に挨拶をした。そうして、來意と共に、皆て子供のための人形芝居について結城孫三郎君を訪問した時の話から切り出した。二回三回と訪問が重なるにつれて、こつちのいうことだけは、よく分つてくれたのであつたが、それがある程度で尻切れとんぼになつたのは、つまり彼の熱心が足りなかつた爲という外はない。彼は後に日本教育紙芝居協會の一員として、版畫紙芝居の企畫に當つたが、實は教育なんて銘をうたないで、たゞ『日本の子供』のものとしての紙芝居を仕上げ度いのが彼の希望であつたのである。彼は街の紙芝居や達の多くが餘りに低級なのを遺憾としたが、その人達が自分も楽しみながら人形を動かしかし口

演している様子を見ては、これではいけないといつも思つた。自分自身には少しも楽しくなくて、たゞ、子供達のためという教育的態度だけでは、小なりと雖も舞臺藝術は成功しない。元締と話している間に、『あの若い者はみんな、自分で紙芝居が好きでたまらん奴等であら』といつた短い言葉は、いつまでも彼の頭に残つてゐる。

駄菓子屋、紙芝居とは性質を異にするが、彼の歸國後の熱心に力を注いだものゝ一つだつた農繁期託児所の唱道も『日本の子供』のために日本が生み出したものであることにおいて一つであつた。勿論彼の創案でも創設でもない。岡山縣その他に先驅者があつたのだが、しかし、『日本の子供』特有の要求である此の施設は、當時まだ少しも普及していなかつた。それは都市の幼稚園とは勿論、工場地区のナーセリーともドイツの田舎にあるフォルクス、キングダーハイムとも違つて、農業日本の子供のものである。農繁期毎に放置せられ、水田や古井戸に奪われる日本の農村の幼児達のために、幼児教育の原理は暫く後として、差當りの必須の急務施設である。理論もない簡單なことだから、廣く普及しさえすれば唱道の用もないのだが、それまでは急いで唱道しなくてはならなかつた。彼はそのため、幾つかのパンフレットを書き、機會ある毎に説いて廻つた。學問でも論説でもない。『日本の子供』の現實の急問題だから。

街の駄菓子屋も、紙芝居も、農繁期託児所も、純日本的なものである。暫くは新歸朝者といわれて、輸入業者の仕事に追いまわされた彼が、實は心から興味をもつたものは、これらの眞正銘メード イン ジャパンのレットルであつたのである。